

た児童文化関係の古書にまつわる事柄については『児童文化書々遊々』（出版ニュース社、1988年）があり、これは研究の案内書あるいは解題としても読むことができる。]

そもそも著者がこれらを執筆するに至った経緯やそれらを発表する場の性格上、どうしても寄せ集めの論集になっている感は正直言って否めないが、本書は、児童文化財の研究において比較的手薄な児童出版美術や児童音楽の分野なども含め、児童文化財を研究するものにとっては多くの示唆といろいろな手がかりを得るための情報源となりうる要素がずいぶんある。その意味で、『児童文化史の森』は、混沌とした「森」を探索するためのまさにガイドブック的な役割を担っていると言えよう。

「子ども文化」概念の出現以来、これまでの児童文化研究のあり方を問い直す気運があり、それに関してはこれから論議して行かねばならないが、従来みられた〈子どものための文化〉としての児童文化財研究ばかりでなく、現実の子どもの生活に根ざした児童文化（財）研究の新しいあり方を提示するようなものを今後さらに期待したい。

片岡徳雄 編

## 『文芸の教育社会学』

福村出版、1994年

深谷昌志（静岡大学）

一見したところ、「文芸」を教育社会的に論ずるというのは無謀な試みのように思われる。何故なら、文芸はつまるところ主観の世界の現象で、客観性を重んじる社会学と水と油の関係にある。それと同時に文芸は伝統的な価値観から逸脱したところか出発するような性格を持つ。それに対し、教育は既存の価値の伝達を目的とし、逸脱は厳しく制約される。そうした意味で、「文芸」は「教育」と「社会学」の二重の面で対極の位置を占めるといえよう。

それだけに、「文芸の教育社会学」という書名でどういう内容が盛られるのが興味をひいた。もっとも、編者の片岡徳雄教授は「四谷怪談の女たち」（小学館）、「日本人の親子像」（東洋館）などを通して、文芸を手がかりとしながら親子関係を中心に日本文化の系譜をたどる研究を重ねている。また、大学院生などと学校劇や学校音楽などについての研究成果をまとめた「学校子ども文化の創造」（金子書房）もある。

中でも、片岡氏自身が浄瑠璃や歌舞伎などへの傾倒は並々ならぬものがあるだけに、文芸の教育社会学は片岡氏にとって長い間暖めていたテーマなのであろう。

なお、本書は片岡教授の広島大学定年退官を契機として、研究室の同人や門下生たちが執筆した「現代学校教育の社会学」（福村書店）の姉妹図書の性格を持つ。

文芸を対象とするだけあって、本書を特長づけるものは多様性であろう。まず、対象とした領域からいうとマンガや音楽、小説そして浄瑠璃まで、多方面に及んでいる。そうした領域の中で、送り手と受けての両方からの分析がみられる。次ぎに方法論からいえば、「やさしさ」の系譜を70年代の小説を洗い出すことを通して事例的に明らかにしようとした原田彰論文（「やさしさ」の分析）から文芸の受容過程を多変量解析で解明を試みた村沢昌崇・白松賢論

文(「文芸はどのように受け取られているか」)まで、それぞれが個性的な方法論を用いている。

そうした多様性をふまえつつも、本書を貫くものは実証性であろう。主観の世界を客観的にとらえるのは困難な仕事で、客観を大事にしすぎると文芸の味わいが失われる。かといって、文芸におぼれこむと科学性が希薄になる。そうしたバランスの上に文芸の教育社会学が成り立っているので、本書にもそうした苦心がかいま見られるが、それぞれの方法で実証を試みている点を高く評価したい。

こうした内容の構成だけに、どの論文も興味深いのが、誰しもが持つ「思い出の歌」を取り上げ、そうした歌との出会いが誰とどういう場でどんなきっかけで作られたかを考察した「出会いとしての音楽」(野村幸治・山田浩之・藤墳智一)を読むと文芸の社会学を身近なものとして感じることができる。また、マンガを書く高校生のマンガ部員の分析を試みた藤田由美子論文(「マンガをかく高校生」)なども納得しながら読むことができた。

ふだん接する機会の少ない領域だけに全体を興味深く読めた。こうした未開拓の分野を切り開き、一定レベルの研究水準に達することができた片岡教授を中心とした執筆者に敬意を表したいと思う。また、編著の場合、玉石混合の論文の寄せ集めになりやすいが、本著は同窓の執筆者だけに問題意識が共有されており、協同作業が成功した数少ない事例に属そう。

ただ、正直にいうと論文の多くはそれなりに興味深いものの、奥行きとか濃くという面での充足感を味わいにくく、研究途上の良い意味での「意欲的な習作」という印象を受けた。評者としては、折角、新しい研究領域が開けたのであるから、執筆者の大学院生の中から片岡氏の研究を受け継ぎ、文芸の教育社会学の可能性を追求して、完成させる人材が登場して欲しいと思った。

浜田寿美男 著

## 『発達心理学再考のための序説』

ミネルヴァ書房、1993年

無藤 隆 (お茶の水女子大学)

浜田氏はワロンの再解釈で最も知られているかもしれないが、どうじに、発達心理学の理論的枠組みへの批判も極めて透徹したものである。本書は、『雑誌』に連載していたその批判的検討を一冊にまとめたものである。

第4章「意味を読み解くということ」において、卒業論文の段階で既に心理学の枠組みへの疑問を抱いていたと語っている。「今日の心理学諸研究の背後にある人間観が、どうも氣にくわない」(p.207)という。「膨大な量の研究論文が膨大な数の問いかけから始まったはずであるにもかかわらず、なにゆえそういう問いを立てるにいたったかと、一つ一つ問いただしてみると、その問いが結局のところ、大学・研究機関のなかで閉じた実験文化にしか根ざしていないことが多い。某という研究者がこれこれの実験を行って注目されたという学会情報が流れれば、他の多くの研究者がとびついて、類似の実験がいくつも積み上げられます。しかし、それもやがてデッドロックに乗り上げてしまうと、次第に忘れ去られ、次の流行に